

「共生のひろば」と市民研究

武田義明（神戸大学大学院人間発達環境学研究科／神戸大学サイエンスショップ）



昨年に続き、第8回「共生のひろば」参加しましたが、今回も多様な発表がありました。

口頭発表12件、ポスター発表28件で、昨年よりやや減ったのが残念ですが、若い高校生の発表が増えたのが印象的でした。また、口頭発表とポスター発表の両方を行っていた団体・グループもありましたが、どちらかだけにすればもう少し多くの発表が期待されたのではないかと思います。昨年多かった里山関係の発表が少なかったのも残念でした。

今回の発表も子どもからシニアまで幅広く、市民活動の広がりが感じられます。特に、紙芝居をつかった「あかねちゃんとその仲間を知ろう」は幼児にも分かりやすくミヤマアカネの生態を知ってもらおうという取り組みは印象的でした。さらに、高校生の黒大豆に関する研究とかヤマイモのグリーンカーテンなどの研究は地元の産物と結びついた研究は地域の産業に貢献するもので評価されると思います。また、国際学会に参加し、英語で発表した報告は、高校生の活躍が国内だけでなく世界にまで広がるものです。このように高校生の発表は将来を期待させてくれるものでした。

市民の研究も地域に根付いたもので、地道な活動が評価されます。世界的に生物多様性の危機が叫ばれていますが、その保全の取り組みは地域から行わなければなりません。そのためには地域の自然をよく知る必要があります。研究者は全ての地域を調査研究できるわけではないので、市民や住民の地域的な取り組みは非常に重要になります。私も吹田市で「紫金山みどりの会」や「吹田みどりの会」で活動しています。「紫金山みどりの会」は約10年前に結成され、吹田市紫金山公園で里山管理を行っています。紫金山公園は約11haで里山の一部が残されています。当初、都市型の公園として整備される予定でしたが、市民の要望で里山を活かした公園として計画されることになりました。しかし、里山の遷移が進みアラカシ、クロバイ、カナメモチなどの常緑樹が増えコバノミツバツツジやモチツツジが衰退し、花つきが悪くなっていました。紫金山という名前は、以前は春になるとコバノミツバツツジが咲き誇り、山が紫に見えることから、その名がついたといわれています。そこで、自然遷移に任せる部分と里山管理を行って夏緑樹林やアカマツ林として維持するエリアを設定し、活動を行ってきました。その結果、今ではコバノミツバツツジが再生し、見事な花を咲かせるようになり、吹田の名所の一つとなっています。

一方で、吹田市の残されている緑地は孤立していてモウソウチクの繁茂しているところが多く

見られます。吹田の千里丘陵はタケノコの産地として有名で、各所にモウソウチクが植えられていました。それが、この地域が開発され、里山の一部が緑地として残されたのですが、モウソウチク林も含まれていました。この竹林が孤立した緑地に広がり、アカマツ林やコナラ林を駆逐してきています。モウソウチクが広がると常緑のため下になった植物のほとんどが枯れてしまい、タケしか残りません。吹田市の第4緑地にはヒメボタルが棲息しており、吹田市の天然記念物に指定されています。しかし、そこにもモウソウチクが繁茂し、ヒメボタルも脅かされるようになりました。そこで、「吹田みどりの会」ではタケを伐採し、下草の回復を図り、ヒメボタルの住みやすい環境をつくろうとしています。その成果も徐々に出てきています。このような活動には、あらかじめ管理計画を立てる必要があり、そのために専門家の助言も必要でしょう。また、管理に際しては公共の土地であり、周辺住民や行政の理解・支援も必要となります。人と自然の博物館には、市民や住民に助言できる人材が揃っており、期待されます。

市民の研究や環境保全の活動を一般の人や他の団体に知ってもらうことは活動の広がりや発展に繋がると考えられます。この「共生のひろば」は、自分の団体の活動をしてもらう以外に、他の団体の活動を知るという点で、非常によい機会だと思われます。最後に、さらなる発表や交流の機会が増えることを期待します。